

国際交流時代のレジャー・レクリエーション ー国際交流事業におけるボランティア活動ー

川西 正志
(鹿屋体育大学)

<国際交流とは>

日本における最近の国際交流と名のつく事業を見てみると、大きくは、一時的なイベントなどで諸外国との人的交流や外国からの物的交流を核にしたものと、限られた外国との国同士の継続的な文化交流を核にしたものと大別される。前者は、国際的な人材交流や交流イベントに外国人が参加することを意味し、後者は、姉妹都市提携などがあたる。さらに、その国際社会の範囲も日本の場合アジアから全ての外国を範囲にしたものや、交流世代の範囲や規模の大きさが多様である。21世紀には、日本の社会の至る所で、国際化が加速度的に促進されることが予測される。スポーツやレジャー・レクリエーション分野においても、イベントなどの冠に「国際」と名の付く大会やプログラムが年間事業の様々なところにみられる。レジャー・レクリエーション分野においても、スポーツと同様グローバルライゼーションは進んでいる。各種のニュースポーツ活動のプログラムや用具の導入をはじめ、日本のプロスポーツにおける外国人選手の招聘、各種スポーツやレジャー・レクリエーション大会の国際大会での外国人の参加など、その範囲や内容も広範多岐にわたっている。

<諸外国の国際交流事業>

諸外国における大きな国際交流事業の一つである国際博覧会は、1851年のロンドン万国博覧会を始まりに、2005年愛知で開催予定の日本国際博覧会まで42回を数える。これまで日本では、大阪での日本万国博覧会を初め4回開催されている。博覧会では各国の観光レクリエーション分野も含めた各地の物産や文化の交流がなされている。また、スポーツの分野では、オリンピック、ユニバシアードなどの世界規模で実施されるイベントをはじめ各種スポーツ種目別の競技大会がその象徴である。また、スポーツ愛好家の増加に伴って、必ずしも高度な競技レベルを要求しないマスターズ陸上や水泳など幅広い層の国際大会から、障害者スポーツ大会などその範囲も広がっている。

スポーツの分野で興味深い国際交流プログラムの一つに、カナダ国オンタリオ州にある、パーティシパクションの主催してきた「国際チャレンジデー」がそれにあたる。このプログラムは、同時期に同サイズの国際的な都市や地域における運動プログラムへの参加率を競うというユニークなプログラムで、国際地域社会同士の交流と実施地域における人々の健康や運動への動機付けにもつながっている。現在このプログラムは、日本のSSF(笹川スポーツ財団)がパーティシパクションのノウハウを生かし実施している。国内でこの国際チャレンジデープログラムは5地域で実施されている。

<国際交流事業におけるボランティア活動>

国際交流事業に限らず、各種イベントや人的交流プログラムには多くのボランティアを必要としている。阪神淡路大震災を契機に多くの日本人がボランティアへの認識を深めたことは確かな事実である。21世紀が参加型社会の特性をもつとするならば、広く社会の場面で自分にあった役割をもつボランティア活動に参加し、肌で社会を感じる事が重要な課題である。すでに、大学では学生のカリキュラムにインターンシップ制度を発足させ、また単位としてボランティア活動を奨励している。理論と実際の現場を結びつける実践的な指導者や専門家の育成が今日的な大学教育に要求されているのも事実である。

今年長野で行われた長野オリンピックではNAOC発表で32,579名のボランティアが参加し、その後のパラリンピックでは、3,195名の運営ボランティアが参加したという。この数が多いか少ないかは別とし、国内で実施される国際スポーツイベントや、地方で開催されるイベントにも地域ぐるみで多くのボランティアが参加している。

一昨年、カナダで行われた知的障害者のための世界80ヶ国2000名の選手が参加した冬季スペシャルオリンピック世界大会を見る機会を得たが、すべてをボランティアだけでプログラム運営やその専門的な指導には、目を見張るものがあった。また、その大会の募集要項では、インターネットのホームページを通じ、各部門別役割別のボランティアの職務内容と応募方法が記載されている。スポーツの審判や競技運営をはじめ、コンピュータ技術者、通訳者、イベントの司会などタレント性を重視したものから、滞在地での各国の選手のケアや運送のための運転手などその役割が明記されている。いわゆる「やりがい」、「専門性」、「役割」を重視したボランティア活動ともいえる。とかくお手伝いと思われやすいボランティアの意識や実態から、自発性とその職務にやりがいを求めることが今後の日本の学ぶべき点かもしれない。ボランティア活動への意識が高まりつつある日本においては、今後の超高齢社会やバリアフリー社会においてもボランティアの活躍が期待される。ましてや、それが当たり前とされる国際社会における交流事業では、その活動の概念や目的が社会的にも認知され達成されてこそ意味をもつものと思われる。